

トーマス・マンの「変節」と天文学

小林 英 信

I

以下余り文学的と言えない叙述になるだろう。まず、次の二文を比較することから始めたい。

A) ドイツ民族は政治的デモクラシーを愛することは永久にできないだろう、とわたしはふかく確信しているが、その理由はきわめて簡単である。すなわち、ドイツ民族は政治そのものを愛することができないからである。また、悪名たかい「官憲国家」は、ドイツ民族にふさわしい当然な国家形態、根底においてはドイツ民族がみずから欲した国家形態であるし、また、いつまでもそうであるだろう、とわたしは信じて疑わない¹⁾。

B) 私の意図は、これをはっきりと申しあげれば、必要ながぎり諸君を共和国のために獲得することであり、デモクラシーと呼ばれているもののために獲得することでありませ²⁾。

この二文を読んで、人はまず第一印象としてどのような印象を持つだろうか。おそらく大方の人は次のような印象を第一印象として持つに違いない。この二文はデモクラシーについて全く逆のことを言っている、全く矛盾した文章だと。

では次に、この二文が同一の人間によって、しかも約四年間という余り時間を置かないで書かれたものであると聞いたら、その時人はどう思うであろうか。おそらくこの時もまた大方の人は、そのような矛盾した、正確に言えば全く相反した文章を大した時間も置かないで書くような人間は定見というものを全く持たぬ節操のない人間だ、話は政治の話であるようだから、そのような人間はいわゆる日和見主義者、便乗主義者であるにちがいない、と思うことであろう。

ところで、この二文を書いた人物がトーマス・マンであることは、タイトルおよび脚注などから容易に推察できるであろうが、そのトーマス・マンは実際にBの文を書いたとき（正確には彼はこの文を講演のなかで語ったのであるから、彼が語ったとき、と言うべきであろう）聴衆から足を摺る音による激しい抗議を受けている。講演はそのために何度か

1) Thomas Mann, *Gesammelte Werke in dreizehn Bänden*, S. Fischer Verlag, 1974, Bd. XII, S. 30.

2) Th. Mann, a. a. O., Bd. XI. S. 819.

中断されているが、トーマス・マンは「若い人々よ、——そのような音をたてるのではない！」³⁾と叫び、彼らを諷めながら、講演を続行している。すなわち事の起りは『ドイツ共和国について』(以下『共和国』と呼ぶ)という講演であった。彼はこの講演を第一次大戦が終ってからしばらくして、つまり1922年に行なっているが、その講演のなかで上のBの文を語っているのである。おそらくこの講演を聞きにきた大部分の聴衆は大変驚いたことであろう。なぜなら、彼らはトーマス・マンについては、第一次大戦中に書かれた書物やエッセイ、とくに600ページにも及ぶ大部の書物『非政治的人間の考察』(以下『考察』と呼ぶ)におけるトーマス・マンしか知らなかったからである。Aの文章はその『考察』のなかの一節であるが、その文章は『考察』における著者のデモクラシーに対する基本的姿勢を象徴的に述べるものと言ってよく、事実トーマス・マンは『考察』においては紛うことのない反デモクラット、反共和主義者であったのだ。のみならず、「官憲国家」を是認していることなどみてもわかるように、トーマス・マンは国民にとっては強力な国粋主義的イデオログとして映っていたのだった。しかるにどうであろう、彼は『考察』におけるそのような態度をきっぱりと捨て、今は容デモクラット、容共和主義者として演壇に立ち、自分たちにデモクラシーを認め、共和国を擁護せよといっているのではないか。聴衆が驚き、足を摺ることによって抗議の意志を表わしたとしても全く無理はない⁴⁾。

では、トーマス・マンは全く変節したのであるか。この問題を検討する前に、トーマス・マンがこのような聴衆の怒り、抗議に対して行った反論、というよりむしろ弁解といった方がよいが、とにかくそのようなものをみておこう。

トーマス・マンは後に、といっても同じ年にだが、この講演を本にしている。その際彼は序文をつけ、そのなかで次のように述べている。

筆者はその本質において、志操(Sinn)において一貫して変らなかつた、それゆえ、筆者をその「変貌」ゆえに賞讃する人々に対しても、それをドイツ精神に対する裏切りとして咎める人々に対しても、次のように答えることができる、すなわち、ここで共和国に対して励ましを与えているのは、『考察』の進路の正確な、今日にいたるまで断続のない継続であつて、その志操(Gesinnung)は変化がない、あの書の志操、すなわちドイツの人間性の志操は否定されていない、と答えることができるのである⁵⁾。

3) Ebenda, S. 816.

4) Friedrich Hussong, *Saulus Mann*, Der Tag, 15. Okt. 1922. (*Thomas Mann im Urteil seiner Zeit*, hrsg. von Klaus Schröter, Christian Wegner Verlag 1969, S. 100.)

「四年前には文明の文学者、平和主義者、政治、民主主義者、共和主義者に反対する浩瀚な本を著わし、その本を通じて、ドイツの知性がそれまでに語ることができた戦争体験および戦争の打撃についての論のうちで、最も本質的なことを述べた(中略)トーマス・マン——すなわち、コスモポリタンのサウロから愛國的パウロとなっていたトーマス・マンは、今晚ふたたびサウロという名前を名乗り出た。」

5) Th. Mann, a. a. O., Bd. XI, S. 810.

この序文からみる限り、トーマス・マンの講演に対して反応を示したのは、その「変貌」を非難した人たちがばかりではないようである。その「変貌」を歓迎し拍手を送った人もいたようである。もちろんそれらの人々が「文明の文学者」に代表されるようなデモクラット、共和主義者であったことは言うまでもなく、また、その拍手がデモクラットになったマン、共和主義者になったマンに対する拍手であることも言を俟たない。しかしトーマス・マンはその両者をともに否定している。なぜなら、彼らはトーマス・マンからみると同じ穴の貉であって、みずからの本当の姿、マンの言葉で言うと「志操」の不変性を見抜くことのできない人たちであるからだ。別言すれば、この講演が他ならぬ芸術家の講演であること、トーマス・マンの考え方によると芸術家は「時代が変わったときに（自己の）つねに変わらぬ志操を主張する必要が生じた場合、以前とは異なる考え方をし、異なる喋り方をする」⁶⁾らしいが、そのような芸術家の講演であることを彼らは完全に忘れてしまった人たちであるからだ。トーマス・マンはそのような人たちを「思想の監視人」⁷⁾と呼んでいる。

それはともかく、この反論に述べられているように、トーマス・マンは自分自身では『考察』以来『共和国』の今日に至るまで一貫して変わっていないと思っていた。正確に言えば「その本質において、志操において」変わっていないと思っていたのである。しかし、このようにわざわざ断って限定しているということは、外の点では変わっているということ認めることであろうか。これについては、トーマス・マンはいま引用した文の少し前のところで次のように述べている。

私は志操の変化などというものは知らない。ことによると考え（Gedanken）は変えたかもしれない——⁸⁾。

つまり、トーマス・マンは序文をわざわざつけてこう弁明しているのである。自分は『考察』から『共和国』にいたるまで「志操」という点では全く変りがない、それは一貫して継続している、しかし、「考え」は変わったかも知れない、と。さらに先に引用した芸術家の特性からすると、芸術家である自分は「志操」を維持するためによしんば「考え」を変えたとしても何ら恥じるところではない、と。このいわば自己弁護の論理をトーマス・マンはさらに次のような「考え」=道具論によってさらに正当化しようとしている。

考えというものは、詭弁に聞こえるかもしれないが、つねに目的にいたる手段、ある志操に奉仕する道具にすぎない⁹⁾。

6) Ebenda, S. 809.

7) Ebenda.

8) Ebenda.

9) Ebenda.

しかし、こうも簡単に割り切って考えてよいものだろうか。なぜなら、「志操」とか「考え」といった深く内面にかかわる問題を、「目的」とか「手段」といういわば現実行動における方法論的な関係に、こうまで無媒介に還元してしまってよいものかどうか大いに疑問が残るからである。それは一種の矮少化、ないしすり替えではないか。具体的に考えてみよう、そうすればそのことがいっそうはっきりとするであろう。つまりトーマス・マンは、彼の「志操」である「ドイツの人間性」を維持し擁護していくために、彼の「考え」を『考察』の反デモクラシーから『共和国』の容デモクラシーへと変えたのである。果して、上にみたような「考え」=道具論からして、反デモクラシーにしる容デモクラシーにしる、それは単なる手段にしかすぎない、手段である以上都合によってどちらを選択しようとするかは大した問題ではない、といて済まされるだろうか。そもそも芸術家は政治を、別言すればイデオロギーをこととする人間ではない、従って反デモクラシーから容デモクラシーに移ったとしても何ら責められる筋合いはない、といて居直れるのだろうか。

言うまでもなく、「考え」=道具論をのべる当のトーマス・マン自身が、この論理の強引さに気付いていたものと思われる。なぜならトーマス・マンはその文中に「詭弁に聞こえるかもしれないが」という一節を挿入し、はっきりとその論理に留保をつけているからである。しかし考えてみれば、それほど強引な論理でもって自己弁護しないと、反デモクラシーから容デモクラシーへといういわば政治姿勢のコペルニクス的転回を十分に正当化しえなかったのかもしれない。やはりトーマス・マンは、変節したのであろうか。

II

ところで、事は政治ないしイデオロギーの問題である。人はそのような問題においてはよく挙げ足とりをやる。つまり言葉の奥にある話し手の真意を誠実にかつ客観的に汲み取ろうとせず、その真意からすれば全く部分的な瑣末な意味しか持たない二言三言を大げさに取り上げ、それを自分の陣営に都合のよいように解釈し、その解釈に基づいて相手を批判しようとするのである。このトーマス・マンの場合もそうであった。この講演を聞きにきた聴衆は、とくにトーマス・マンの口から『考察』におけるようにデモクラシーないし共和国に対して、とりも直さず戦後の大混乱の張本人である共和国の指導者に対して、胸のすくような痛烈な非難の言葉を期待していた聴衆は、マンの一言二言の容デモクラシー的、容共和主義的発言を耳にただけで既に色をなし度を失ってしまった。自分の目の前に節操を失ってなお平然と立っているトーマス・マンへの怒りばかりが増大し、彼らには以下にのべるようなマンの論理など全く眼にもとまらなかったのである。しかしこれにはトーマス・マンにも責任がある。最後のところであるが、彼はこともあろうに「共和国万

歳ノ」とまで叫んでしまっているからである。この一言は、それまで不満はあるにせよ、我慢に我慢を重ね、一応マンの言うところを客観的に追っていった人々をも怒らせてしまったに違いない。実は、この言葉ほどその講演の内実からかけ離れている言葉はないのである。では一体、この講演の内実とはどのようなものであったのだろうか。次にこれを検討してみよう。ここでは論点を『考察』から『共和国』への「断絶のない継続性」という一点に絞り、その視点から問題を明らかにしてみたい。

『共和国』におけるトーマス・マンの現実に対する基本的態度は次のようなものである。

否定者、敵対者たるを問わずあらゆる人間にとって内的事実 (innere Tatsachen) である事実を否定し、現実のうちにこれをはっきり現出させようとする態度は、馬鹿げているという他はない¹⁰⁾。

ではその「内的事実」とは具体的にどのようなものを指すのであろうか。トーマス・マンはこれについて次のようにのべる。

共和国、デモクラシーは今日そのような内的事実であり、私たちすべてにとって、個々一切の人間にとって内的事実であります¹¹⁾。

共和国はそのもっとも悪意ある敵対者から見ても内的な真実である……¹²⁾。

この二文とその上の一文とを重ね合せると、その当時トーマス・マンが社会ないし政治の現象に対してどのような考え方をもっていたか、少なくともその基本的なものぐらいは伺える。まずトーマス・マンは、内面と外面の事実に関しては、何人であれ「内的事実」すなわち「内的真実」であるものは、それを現実のうちにはっきりと現出させねばならない、言いかえれば「外的事実」¹³⁾化させなければならないという態度をとる。もし「外的事実」が「内的事実」と一致していない場合は、それらが一致するよう「外的事実」を変革し克服しなければならない。なぜなら「内的事実」と一致していないような「外的事実」は「確かに現実ではあるが真実ではない」¹⁴⁾からである。そのように努めることこそ「賞むべきであり、精神のしるしである」¹⁵⁾のだ。トーマス・マンはこのような基本的態度を現実に対してとる。そしてトーマス・マンはその当時の「内的事実」を共和国＝デモクラ

10) Ebenda, S. 821.

11) Ebenda.

12) Ebenda, S. 824.

13) Ebenda, S. 821.

14) Ebenda.

15) Ebenda.

シーとみていることから、彼はその共和国ないしデモクラシーをドイツの現実のうちに現出させようと努力する。しかし、冷静になって考えてみれば、当時のドイツ国民は既に共和国を有していたのである。すなわち「外的事実」でもあったのだ¹⁶⁾。この内外一致した事実である共和国に対して敵対し、それを認めようとしない人々に対してトーマス・マンは次のように語りかける。

共和国は一つの運命であり、これに対しては「運命愛」こそ唯一の正しい態度であります¹⁷⁾。

このようにトーマス・マンは非常に覚めた眼でもって時のドイツの現実を眺め、そしてその現実である、トーマス・マンの言葉で言うと、内的、外的ともに事実であり真実であった共和国＝デモクラシーを理性的な態度で受け入れ¹⁸⁾、さらに敵対し否定しようとする人々に対しても講演という形でそれを容認するよう説得にあたっているのである。

では、なぜトーマス・マンは内外ともに一致している共和国＝デモクラシーを、非難をあえてして擁護するよう国民に訴えかけたのであろうか。これには彼なりの危機意識があったのである。さし当っては二つのことが考えられる。

ひとつは、トーマス・マンも講演のなかで「共和国のもっとも洗練された従僕の繊細、賢明な頭(＝外相ラーテナウ。彼はこの講演の数ヶ月前に右翼の青年によって暗殺された)を打ち砕いた」¹⁹⁾という言葉で暗示しているが、戦後の未曾有の混乱の中で共和国＝デモクラシーがその存立の基盤を危くされているという危機意識である。この混乱ぶりがどのようなものであったかは、ピーター・ゲイが要領よくまとめているのでそれを引用しておく。

共和国の初期の4年間は、殆ど中断されることのない危機の歲月、本当の困窮の時代であった。血腥ぐさい内戦、政治勢力としての軍部の再登場、帝政時代を支配していた貴族と産業界の連合を打破することの失敗、度重なる政治的暗殺と、その暗殺者の無罪放免、ヴェルサイユ条約の負担、カップ反乱、その他の国内破壊工作、フランスのルール占領、天文学的なインフレーション——これらすべてが王党派、狂信的な軍国主義者、反ユダヤ主義者、あらゆる種類の排外主義者や産業界に、新しい希望をよみがえらせた²⁰⁾。

この文章にみられるように、当時のドイツは大変な混乱状態にあったが、この混乱に乗じて再登場してきたのが過去の亡霊ともいえるべき反動的・国粹的保守主義であった。もち

16) Ebenda, S. 823.

17) Ebenda, S. 822.

18) Ebenda, S. 824. 「内的な真実を否定するのは理性あり、名誉ある態度でしょうか？」

19) Ebenda.

20) ピーター・ゲイ、『ワイマール文化』、みすず書房、25頁。(到津十三男訳)

ろんこのとき台頭して来たのはそのような極右勢力ばかりでない。それと拮抗するかのよう
に極左勢力も次第に歴史の舞台の前面におどり出てきたのである。この二つの勢力はお
互いに勢いを増しながら相争っていた。その結果ドイツは内戦さながらの状態にあったの
である。その谷間で右往左往していたのがトーマス・マンの擁護するドイツ共和国＝デモ
クラシーであった。それは政権をとっているものの民心を得るような有効な政策は殆どと
りえず、次第にその支持勢力を左・右のラディカルズムに侵蝕されながら、その存立基盤
を失っていったのである。

では、一体なぜトーマス・マンはそのように共和国＝デモクラシーが危機に瀕している
ということに危機感を抱いたのであろうか。『考察』のころのトーマス・マンからすれば、
むしろそのような現象は心から歓迎するということこそすれ、決して心配などする必要は
なかったはずである。しかるに擁護までするというのは、一体なにゆえにであろうか。実
はトーマス・マンにはその背後にもうひとつ、彼にとってはより重要な、より切実な危機
意識があったのである。つまりそれはトーマス・マンが芸術家として、なによりも一個の
人間としてその存在の根拠とみなしていたドイツ的市民文化ないし芸術が危機に瀕してい
るという意識である。トーマス・マンは講演のなかで次のように言う。

私たちはすべて（私も含めてです！私も！）古い国家権力が、ドイツ的美の実現の努力に
対置したもろもろの抵抗を、過小に評価してはいなかったか、今、名をあげられた人々（＝
ゲーテ、ニーチェ、ヘルダーリン、ゲオルゲ）が予言した新しい人間性、デモクラシーに肩
をすくめる諸君の憧憬溢れる誇りやかな心にひそむ新しい人間性、これが活気を帯びる有利
な可能性を見出すのは、古い国家の基盤（Grund）よりはデモクラシーの地盤（Boden）、
共和国の地盤の上においてではないだろうか、と……²¹⁾。

この文にある「古い国家権力」の継承勢力が反動的・国粹的保守勢力であることは、既
にのべたことから容易に推察されるであろうが、この勢力がゲーテその他のドイツ的市民
文化ないし芸術をトーマス・マンが考えているような歪曲しないその本来の形で享受し維
持していかないことは自明の理であった。かといって、もう一方の極左勢力も、トーマス
・マンからみれば、彼らの文化ないし芸術理論からして、ドイツ的市民文化ないし芸術を
歴史的に位置づけ、それを批判的に評価はするだろうが、それを今日に、つまり当時の彼
らの文学的営為のなかに生かしてゆくということは到底期待できなかった。従って残るの
は、つまりドイツ的市民文化ないし芸術が生き残れる方法として最後に残された道は、
左・右のラディカルな社会勢力のはさみうちにあって息もたえだえになっているドイツ共
和国＝デモクラシーと妥協する以外にない。この事実をトーマス・マンは講演という形で

21) Th. Mann, a. a. O., Bd. XI, S. 828.

国民に知らせようとしたのである。トーマス・マンは言う。

デモクラシー、共和国が水準に達しうることを、ドイツ・ロマン主義の水準に達しうることを証明するために、私はこの演壇に立ったのであります²²⁾。

このような二重の危機意識、簡単に言えば、ドイツ的市民文化ないし芸術が危機に瀕している、それを救うにはドイツ共和国と＝デモクラシーと結び付く必要がある、しかしそのドイツ共和国＝デモクラシーも危機に瀕している、という危機意識が彼の心の中にあつたから、彼は多くの人の激しい非難が予想できたにもかかわらず、敢えてドイツ共和国＝デモクラシーを擁護したのである。このことをみてもわかるように、彼の社会的・政治的立場は、決して進歩的でもなく又ウルトラナショナリズムのような保守でもなかった。しいて言えば心情的には保守的であるが、理性でもって共和主義者になろうとしている、いわゆるピーター・ゲイの言う「理性的共和主義者」²³⁾であると言える。彼らの政治的役割はピーター・ゲイによると、次のようなものである。

「理性的共和主義者」はその理性を和解のために役立たせようとした。彼らは階級と階級との和解、政党と国家との和解、ドイツと他の世界との和解、そして、自分自身と共和主義との和解をはかろうとした²⁴⁾。

ところでトーマス・マンがこのいわば中心的テーマとでも言うべきものを、どのような論理を使って証明しているかということであるが、彼はそれを主に二人の人物、つまりアメリカン・デモクラシーのナイーブな讃美者ホイットマンとドイツ・ロマン主義のなかにあって初期の知主義的傾向を代表するノヴァーリスとを関連づけることによって行っている。このような論証の仕方においてわれわれが注目しなければならないことは、その論理の正確さあるいは妥当性よりも二人の異質な人物が結びつけられているということ、もっと正確に言うと、「デモクラシーが水準に達しうる」ということを証明するのにわざわざホイットマンをノヴァーリスに関連づけようとしていることである。このような論が果して政治論と言えるかどうか疑問である。事は政治的に効果を及ぼしてしまつたが、この講演を少し冷静になって聞けば、そこで展開されているのはむしろ文化論、文学論であることがわかるはずである。

もう一点この講演の内実を知るために重要と思われることをみておきたい。それはトーマス・マンの

22) Ebenda, S. 836.

23) ピーター・ゲイ、同掲書、41頁。

24) ピーター・ゲイ、同掲書、47頁。

マス・マンがイメージしていた共和国とはどのような共和国であったかということである。

この講演はゲルハルト・ハウプトマンの60回誕生日を記念して行なわれているが、そのハウプトマンとはどのような人物であるか。彼はその経歴をみるといわばトーマス・マンの戦友とも言うべき人物である。周知のように、ハウプトマンは戦前はプロシヤ軍国主義と官僚主義を心から憎み否定した自由主義者であったが、その彼も当時多くの知識人がそうであったように、第一次大戦が勃発すると、ドイツの立場を支持しその戦争を容認してしまったのである。もちろんその背景には西欧、とくにフランスの知識人からドイツの精神および文化が激しく非難され、口汚ない言葉で侮辱されるということがあったが。やがて11月革命がおこるが、この革命に対して彼はいち早く支持の立場を明らかにし、共和国に対しても多大な期待をかけ、さらに国民に対しては平和主義と自力更生を説いて回るのであった²⁵⁾。ざっと以上のことみただけでも、ハウプトマンの社会的・政治的立場がいかにトーマス・マンのそれとよく似ているかがわかるだろう。

またこの講演のなかではエーベルト大統領に対して尊敬の念が捧げられているが、この人物は周知のように、当時政権を掌握していた社会民主党のなかにあつて左・右両派から激しく突き上げられ孤立しつつあつた多数派の指導者であつた。彼の率いる政府は、歴史家の一致するところだが、およそ社会主義的な政策を積極的に実行することなく、なし崩し的にドイツ革命の遺産をくいつぶしてしまい、結局は資本主義を再建することでその歴史的使命を終えてしまったのである。

トーマス・マンのイメージする共和国とは上の二人の人物に象徴されるような共和国であつた。共和国といっても当時の進歩的勢力が考えていたような共和国とは大きくかけ離れていたのである²⁶⁾。

トーマス・マンの『共和国』における内実とは、以上のようなものであつた。一言で言えば、彼の主要関心事はあくまでドイツ的市民文化ないし芸術であつて、それがより生々と息づく社会的ないしイデオロギー的条件として共和国が、あるいはデモクラシーが問題となつたまでである。前者のドイツ的市民文化ないし芸術が序文でいう「志操」であり、後者の共和国ないしデモクラシーが「考え」であることはもう多言を要しないであろう。この内実からすれば、やはりトーマス・マンの「共和国万歳！」という言葉は激越にすぎたのである。

ところで、既にのべたことだが、この講演を聞いて人が腹をたて抗議の足摺りをしたのは、実はトーマス・マンが『共和国』において『考察』とは全く異なる考え方をのべたか

25) 横溝政八郎、『ヴァイマル共和国とゲルハルト・ハウプトマン』、ドイツ文学Nr. 40, 82頁。

26) 村瀬興雄、『ドイツ現代史』、東大出版会、236頁。

らである。では一体彼は『考察』においてどのようなことを述べていたのであろうか。順序は逆になったが、このこともみておく必要がある。

III

実兄ハインリヒとの喧嘩から端を発したこの大部な書物では、様々な議論が入り組み、次元を異にするいくつもの問題が同時に重なり合いながら出てくる。そのため、これらの議論や問題を統一的に捉え、要領よくまとめるということは不可能である。ここではⅡ章との関係から、やはり論点を『考察』から『共和国』への「断絶のない継続性」という一点に絞り、その視点から問題を整理してみよう。

いまこの書物は兄ハインリヒとの喧嘩から端を発したといったが、その兄のことはこの本のなかでは「文明の文学者」という名前では呼ばれている。この「文明の文学者」はトーマス・マンによると、精力的に「ドイツの政治化、文学化、知性化、急進化」²⁷⁾、一言で言えば「ドイツのデモクラシー化」²⁸⁾を押し進めようとしていた人物であった。もちろん当時のトーマス・マンからみれば、そのような人物は西欧かぶれであり、とくにフランスかぶれであり、ドイツ人として、芸術家ならなおさらのこと許せなかった。当然のことながら、トーマス・マンはこのような人物を徹底して論駁すべく攻撃を開始する。その際、トーマス・マンは武器を自己の教養体験に求めた。つまり彼が三連星と呼び、彼の内面において分ち難く緊密に結びついているヴァーグナー、ニーチェ、ショーペンハウアーらの芸術および哲学の世界がそれである。トーマス・マンは「文明の文学者」に決定的なダメージを与えるべく武器を求めて、深く深くそれらの世界にわけ入っていくが、幸か不幸か、彼はその世界に深く入れば入るほど、すなわち彼らの芸術や哲学を深く分析すればするほど、それらの世界には、純ドイツ的要素は言うまでもないことだが、単にそればかりでなく、それを超えた、いわばヨーロッパ的要素とでも言うべき要素が本質的なものとして含まれていることがわかったのである。皮肉なことにその要素はまた、今自分が敵として論駁しようとしている「文明の文学者」の本質的要素でもあったのである。とりわけ驚いたことは、彼が天職とし、その世界においては魚が水を得たように自由に感じる文学こそ、「ドイツのデモクラシー化」を強力に押し進めていた張本人であった。トーマス・マンはその驚きを次のようにのべている。

文学は根本的にデモクラティックで文明的であるからだ。もっと正しく言えば、それは、

27) Th. Mann, a. a. O., XII, S. 68.

28) Ebenda.

デモクラシーや文明とおなじものであるからだ。してみると、わたしをしてドイツの「進歩」をわたしなりに——それと保守的に戦うことによっても、なおかつ推進せしめた張本人は、わたしの文筆家気質だったということになるだろうか²⁹⁾。

万事休す、である。論駁しようとした敵の本質的要素を、無意識とは言え、自己の内にも持ち、阻止しようとした相手の行動を自らが知らず知らずのうちにとってしまっていたのである。これではもう利敵行為である。勝負はあった。あっさりかぶとを脱ぐべきである。ではトーマス・マンは実際にそうしたかという、そうはしなかった。彼はその事実を知りながら、なおも執拗に「文明の文学者」に向って戦いを挑んでいったのである。後にトーマス・マンがこの戦いを回顧して次のように言う由縁である。

それは大規模の退却戦である——ドイツ的=ロマンティック市民性の、最後のそして最も遅かった戦闘である——見込みのないことは百も承知の上で交えた戦闘、それゆえにまた高貴な心を伴わぬまでもない戦闘である³⁰⁾。

ではなぜトーマス・マンは、そのような敗けるとわかっていた苦しい戦いを挑まなければならなかったのだろうか。これにはいくつかの理由が考えられる。まず次のような彼の言葉をみてみよう。

かれは、ある発見をのぞみ、それを推進している。わたしも、その発展を必然だとおもい、というのは、不可避だとおもい、自分でも自分の資質に応じて無意識ながらある程度はそれに参与してきた。が、だからといって、歓声をあげてまでその発展を声援すべき理由が、わたしにはわからないのだ³¹⁾。

『考察』は1915年末から1918年始めにかけてかかれたが、この文章は1915年末から16年初頭にかけて書かれたものであると推定されている³²⁾。とすれば、このような認識は『考察』が書き始められたころからあったといてよい。言いかえれば、この戦いが「大規模な退却戦」であるという考えをトーマス・マンは、この『考察』を書きつづけている間ずっと抱きつづけていたことになる。それにしてもなぜこのように苦しい闘いを彼は続けたのであろうか。その理由として上の理由では弱すぎるのである。きっとその他にもっと大きな理由があったはずである。この問題に対してトーマス・マンは正面きって答えていない。しかし彼はそれを解く手掛かりとなるような文章をあちこちでのべている。それらをつな

29) Ebenda, S. 40.

30) Ebenda, S. 640-1.

31) Ebenda, S. 67.

32) 前田敬作・山口知三、《『非政治的人間の考察』、筑摩書房、《解説》366頁)。

げることによってこの問いに対する答をさぐってみよう。まず彼の次の言葉に注目したい。

音楽からデモクラシーへの進歩——本書において「進歩」について語られる場合にそれがつねに意味するのは、この進歩である。(一文略) この書は、公然とこの進歩と戦い、これに保守的な抵抗をしているからである³³⁾。

この文の解釈において問題となるのは「音楽」という言葉であろう。他の言葉、つまり「デモクラシーへの進歩」にしても「保守的な抵抗」にしてもこれまでにみた「デモクラシー化」ないし「大規模な退却戦」という言葉と同じ意味のことをのべる言葉であるから問題はない。では一体「音楽」という言葉はどういうことをのべる言葉なのであろうか。まず、すぐにも気付くことは、この「音楽」が具体的にはリヒャルト・ヴァーグナーの音楽を指すということである。そのことはこの文の少し前のところを読むと、そこでトーマス・マンがヴァーグナーの音楽について少し触れていることからわかるが、それがなくとも、トーマス・マンにおいて音楽というと、一般にヴァーグナーの音楽を指すということであるから、この「音楽」がヴァーグナーの音楽であることは容易にわかる。しかし、この言葉の解釈をこれで終ってよいものだろうか。この二語、つまり「音楽」と「デモクラシー」とは全く属する意味領域が異なっており、しかもそのような二語が対比させられていることからすると、この二語は少なくとも何かを代表する、あるいは象徴する言葉として使われていると言える。では「音楽」は何を象徴する言葉であるのだろうか。その場合、その「音楽」がヴァーグナーの音楽であるということは重要な手掛かりとなる。つまり、トーマス・マンにおいてヴァーグナーというと、それと一体になって結びついているいわゆる三連星のショーペンハウアーないしニーチェという名前が即座に思い出されるのである。このことからすると、トーマス・マンはこの「音楽」という一言で、ヴァーグナー、ショーペンハウアー、ニーチェに代表される19世紀のドイツ的市民文化ないし芸術を象徴的に言いあらわそうとしたのではないだろうか。そう解釈すれば「音楽からデモクラシーへの進歩」という言葉も、その意味がよくわかる。前章において検討したように、『共和国』においても、ドイツ的市民文化ないし芸術と共和国＝デモクラシーの関係が論じられていたからである。

ところで「音楽からデモクラシーへの進歩」に「抵抗する」とトーマス・マンは述べているが、これは言いかえると、抵抗の目的は「音楽」を守ることになる。すなわち、トーマス・マンが上にのべたようなドイツのデモクラシー化が不可避であり、必然であるという現実認識を抱きながらも、さらに自分もその発展に手を貸してきたという自己認識を抱きながらも、なお執拗にそのデモクラシー化に抵抗しつづけてきたのは、その背

33) Th. Mann, a. a. O., Bd. XII, S. 39.

後にやはりドイツ的的市民文化ない芸術の擁護ということが大きな理由としてあったのである。『考察』の段階においては、『共和国』の場合と異なり、「ドイツのデモクラシー化」を拒否することがドイツ的的市民文化ないし芸術を維持・発展できると、トーマス・マンは判断したのであろう。逆に言えば、この段階においては、まだドイツ的的市民文化ないし芸術をめぐる諸条件はそう悪化していなかったのかもしれない。少なくともトーマス・マンにはそう思われたのであろう。

このような解釈の根拠としてもう一つ彼の別な発言をみておこう。彼はある所で次のようにのべている。

わたしは、精神的本質からして、まぎれもなく、わたしの生涯の最初の二十五年がぞくしている世紀、すなわち十九世紀の子である³⁴⁾。

その十九世紀が二十世紀に否定されているとしてトーマス・マンは次のようにのべる。

二十世紀は、十九世紀の特徴、諸傾向、基調を排斥し、十九世紀流の実直さ、その意志薄弱と恭順さ、そのメランコリックな不信を誹謗する³⁵⁾。

この文にある「二十世紀」がトーマス・マンものべているように、別な言葉で言えば「デモクラシー」であること、また「十九世紀」が別な言葉で言うとドイツ的的市民文化ないし芸術であることは言うまでもないことであろう。その「二十世紀」が「十九世紀」を排斥し誹謗している。この認識は『考察』を貫抜いてみられる認識である。この認識の上で立って、トーマス・マンは情熱的にねばり強く「十九世紀」を弁護し擁護しようとしたのである。

以上みるように、トーマス・マンが矛盾した行為、つまり自己もその本質からして「ドイツのデモクラシー化」に手を貸しているという認識を持ちながら、なおもその変化を執拗に否定するという矛盾した行為を行なったのは、実はその背後に彼の芸術的ないし人間的存在の根源的基盤であるドイツ的的市民文化ないし芸術をデモクラシーの攻撃から守るという大きな目的があったからである。これが『考察』の重要な一つの内実である。このようにみても『考察』においても『共和国』においても彼の主要関心事がドイツ的的市民文化ないし芸術であるということがわかる。たまたま『考察』においては反デモクラシー的立場であった方がその目的のために都合よく、また『共和国』においては逆に容モデク

34) Ebenda, S. 21.

35) Ebenda, S. 26.

ラシー的立場であった方が都合がよかったまでである。しかし一つだけ言えることは『考察』のあの膨大な書物における徹底した自己吟味による自己認識がなかったら『共和国』の立場もなかったということである。これを一つの人間の発展と呼ばずして何と呼ぼう。また、この発展が内面において断絶なく継続したものであることは言うまでもないだろう。トーマス・マンの「私は志操の変化などというものは知らない。ことによると考えは変えたかもしれない。」という言葉はうそでも何でもなく、彼の内面における真実を吐露したまでである。

IV

とは言えトーマス・マンは確かに変わった。このような変化はトーマス・マンの生涯を通じて続けられている。そしてその出発点を到着点とを比べると、その違いは非常に著しく、これが同一人の発言かと思われるほどである。試みにその一例をみておくと、彼は『考察』の中で次のように述べている。

政治的領域が下級な領域であることは、それが非人格的 (unpersönlich) な領域であるという点に端点にしまされている³⁶⁾。

これに対して彼は『スペイン』(1937年)においては次のようにのべる。

今日「政治なんぞに私はかかわりたくない」と断言する男は、私たちに全く下らなく思われる。私たちは、こういう発言を利己的で世間知らずと感ずるばかりでなく、馬鹿げた自己欺瞞とも感じ、低級で愚かしいとも感ずる。しかしこういう発言がさらけ出すのは、知識上の無知というよりは、むしろ倫理的無知である³⁷⁾。

このような対比はいくらでも続けることができる。しかし、それにしてもこのように全く方向を逆にした発言を直接的に対比させると、つまり、これまでに行ってきたような各々の発言の背景をさぐり、その内実を明らかにするような作業を抜きにして、この二つの発言を見比べると、トーマス・マンは一生変節しつづけてきたのではないかと思われる。言うまでもなくトーマス・マンがそのような人間でないことはこれまでの叙述から明らかである。変節とか便乗ということは、その本人の内面においてそうする必然性が全くないのに、ただ身の安全、地位の向上、あるいは名誉心の充足などといった利害打算から、時代の有力な、あるいは有力になりそうな勢力に付和雷同し、彼らの唱える価値を自らも口

36) Ebenda, S. 255.

37) Ebenda, S. 793-4.

にするということを言うのであるから。

では、トーマス・マンのこのような変化を可能にしたものは、一体何であったのだろうか。彼がいくらそのような変化を望まないと思えば、内面において執拗に抵抗を重ねようとも、彼の内面の深いところで彼の精神に影響を及ぼし、知らず知らずのうちに彼を思っているのとは違う方向へ引きずっていってしまうという、いわば彼の変化の内的動因とでもよぶべきものは何であったのだろうか。この章ではこのことを考えてみよう。

トーマス・マンは1939年、彼の生涯からみれば晩年に属する、しかも亡命という苦しい生活をしいられているころ、過去の問題の書『考察』をふり返りながら、次のようにのべている。

しかし自己探究は、それが十分徹底して行われさえすれば、大抵の場合それだけでもう変化への第一歩を踏み出したことを意味している。それに私の経験からいって、人は誰も自己の姿を認識しながらなお完全に認識以前の状態に留まっているということはない³⁸⁾。

この文の「私の経験」が『考察』における経験をいうものであることは言うまでもないことだが、そう言えば『考察』の二つのモットーのうち一つは「自分をよく比較したまえ。自分がなんであるかを認識したまえ。」³⁹⁾であった。さらに同主旨のことをトーマス・マンは別なところで何度か述べているが⁴⁰⁾、これらの言葉から推定すると、どうやらトーマス・マンの変節の秘密は自己認識にありそうだということになる。もちろんこの問題に関しては色々な角度からのアプローチがあると思われるが、この小論では、この自己認識という角度から、この問題を検討してみたい。

ところで、いま彼の変節の秘密を自己認識に求めたが、自己認識といえど、認識の一種である。つまり認識の対象が自己であるということである。ではトーマス・マンの自己を含めた対象一般に対する認識の仕方はどのようなものであったのだろうか。

トーマス・マンは『文化と社会主義』(1928年)——その中では上にみた「大規模な退却戦」のことも語られている——というエッセイのなかで、この認識の仕方、もちろん彼は芸術家であるから、芸術家の認識の仕方について次のようにのべる。

ところで認識というものは、芸術家が献身により、体験の情熱により、愛情をこめて対象の中へ没入することによってのみ得られるものであり、これ以外のいかなる方法によっても得られない⁴¹⁾。

38) Ebenda, S. 853-4.

39) Ebenda, S. 7.

40) Ebenda, S. 641.

41) Ebenda, S. 640.

この文は認識の方法として二つのことを述べているように思われる。ひとつは認識の主体は「対象の中へ没入する」ということであり、もうひとつは、そのとき、「献身」や「情熱」や「愛情」をもってするということである。前者は文字通りのことであって、問題ないが、後者はもう少し敷衍する必要がある。つまり、これらの三つの言葉から、認識主体の対象に対する態度として、もう少し原理的なものを読みとっておきたいのである。そこでまず「献身」という言葉だが、この言葉には、主体が対象のために尽くすのに自己犠牲ないしは自己留保をもってするという意味がある、従って、この言葉にはそのいみでの自己否定というモメントが含まれている。次に「愛情」という言葉だが、この言葉には対象を無条件につつま込むという意味があり、その意味での対象肯定というモメントがある。三つ目の「情熱」という言葉は、認識主体が対象に対してエネルギーに働きかける、という意味ぐらいに解釈しておけばよいだろう。いずれにしてもこの三つの言葉を総合すると、認識主体は対象に没入するのに、一方では自己を留保もしくは否定し、他方では対象を無条件に肯定する、つまり自己を否定することによって対象を無条件に肯定するという態度をもってする、ということになる。この態度は、ちなみに申せば、トーマス・マンのイロニーの根本的特徴の一つである。彼は言う。「生のためになされる精神の自己否定はイロニーとなった。」⁴²⁾この小論ではこの問題は取り扱わないことにする⁴³⁾。

認識主体の対象に対する態度は以上の通りであるが、ではその対象としてはどのようなものが考えられるだろうか。とくに芸術家の場合、その対象に何らかの特徴があるのだろうか。『考察』の中の次の言葉をみてみよう。

わたしが思うに、芸術家とは、息をひきとる最後の瞬間まで、正道を外れたものや深淵なものにこころを惹かれ、危険で有害なものに対してもこころを開いている感情と精神の冒険家である。かれの任務そのものが心の奥底から精神的に自由に動いていることを義務づけている。彼の任務は多くの世界に住むことを、悪い世界に住むことさえ要求する⁴⁴⁾。

かなり強い表現だが、この言葉からみる限り、芸術家の認識の対象としては非常にネガティブなものも含まれると言える。つまり、芸術家はその義務および任務として、平凡な日常生活における一般的なものは言うに及ばず、その日常的感覚からすれば異常な、危険ですらあるものをも認識の対象としなければならないのである。

ところで、上の認識に関するトーマス・マンの二つの文を重ね合わせると、どういうことが結論として言いうるだろうか。少なくとも次のようには言えるだろう。つまり、芸術

42) Ebenda, S. 25.

43) 拙稿『トーマス・マンにおけるイロニーについてのノート』（『アルテス・リベラレス』、岩手大学人文社会科学部紀要第23号）参照。

44) Th. Mann, a. a. O., Bd. XII, S. 402-3.

家は日常の感覚、正確に言えば、日常の常識的な価値観や倫理感などからすれば明らかに否定的な対象に対しても、自己の立場をいったん留保もしくは否定し、そのことによって対象を肯定しつつ、対象の世界に没入していく、あるいはいかねばならないと。

事実トーマス・マンは、『考察』において自己を認識するとき、「文明の文学者」が、とりも直さず彼は当時のドイツにおいては、敵性用語を使い、利敵行為を行なっているとみなされていたが、その「文明の文学者」が、自己の教養基盤であり、自己の人間的存在の根拠でもあるとみなしていたドイツ的市民文化ないし芸術、あるいはドイツの精神に対して容赦なく投げつける否定もしくは非難の言葉を真正面からうけとめ、その言うところを自己の主張を留保しつつ、丹念にかつ綿密にあとづけ吟味していったのである。その過程で、既にみたような発見、つまり自分が教養体験の基盤とみなしていた三連星の中にも、「文明の文学者」が強く主張し要求していた「ドイツのデモクラシー化」を促進する要素が色濃く含まれている、なによりも自分が天職とする文学こそ最も強力にその傾向を押し進めていたのではないか、という発見をするのである。その結果トーマス・マンは次のような言葉を自信をもって口にすることができたのである。

わたし自身の内部に耳をかたむけさえすれば、時代の声をも聞きとることができる⁴⁵⁾。

ところで、このような認識の方法はトーマス・マンの別の発言からも確認できる。少し見ておくと、『考察』のなかで彼は次のように言う。

さまざまな人物を介して語るのがかれの仕事であるから、芸術家は、必然的に弁証家である⁴⁶⁾。

ここで（『考察』で）語っているのは語ることでなく語らせることを、人間たちや事物に語らせることを習慣にしている人間、従って自分が直接語っているようにみえ、かつ自分でもそう思いこんでいるときにさえ、語「らせている」人間である。（一文略）たまたまそのとき語っている人間の言うことを正しいとし、その人間の肩をもつ文学的詭弁の名残りが——そういう名残りが（この『考察』の）いたるところに疑いもなく残っていた……⁴⁷⁾。

この二文は作家トーマス・マンと彼の作中人物との関係をのべるものとして大変興味深いものがある。

それはさておいて、通常、一つの作品には何人かの、多いときには何十人ものといった

45) Ebenda, S. 28.

46) Ebenda, S. 403.

47) Ebenda, S. 11.

数の作中人物が登場してくる。そしてそれらの人物が様々な行動をとり発言することによって一個の芸術作品という独自の世界が作り出される。これを作家の側から言うとうどうなるか。次のように言えるだろう。作家は自己の構想にもとづいて作中人物を登場させ、彼らに様々なことを喋らせたり行なわせたりするのである。もう少し詳しく言うと、一般的に作家は作品を書こうとするとき、その作品を通じて読者に訴えたい何か、いわば表現意図とでも呼ぶべきものをもっている。もちろん、それを芸術的に効果的に表現するために、色々と計算をし構想を練る。その構想にもとづいて人物を登場させ、彼らを動かしたり、喋らせたりするのである。しかし問題はこのとき生ずる。というのは彼らは素直に作家の意図することを受け入れ、動いたり喋ったりするか、ということである。今ものべたように、確かに作中人物は作家によって創り出された、いわばフィクショナルな人物である。しかし、そうではあるが、いやしくも、その人物が作品において生々とした、生命力あふれる人間であるなら、そのような人物も人間として一個の独立した人格と主張をもっているはずである。当然そのような人物のなかには、作家と人間的質を異にし、考え方を異にする人物がいるはずである。作家が自己の構想にもとづいて、そのような人物を意のままに動かそうと思っても、そのような人物は決して彼の意のままに動いてくれないだろう。このような人物に出会ったとき、作家はどうするのだろうか。基本的には二つの方法が考えられる。ひとつは、構想のほうはあくまで変更せず、従ってその構想からはみ出し、自分に抵抗してくる人物は切って捨て、かわりにその構想にあった、言いかえれば自分の言うことをよく聞く都合のいい人物をもってくるという方法である。もうひとつは、逆に、構想からはみ出し、自分に抵抗してくる人物を決して切り捨てるのではなく、なぜ彼が自分の構想からはみ出し、自分に抵抗してくるのか、いったん自分の立場や意見を留保しながらその原因についてよく考え、その結果了解できた彼の立場や主張はできるかぎり作品のなかに生かすという方法である。この方法をとれば、結果として、作家は自分の構想をもう一度徹底してみなおさざるを得なくなり、時には大きく変更せざるを得なくなるだろう。なぜなら、作家は彼らの立場や主張を彼らの側から検討することにより、彼らの言うことの正当性、彼らなりの真実を知ることになり、引いては自己の立場や意見の偏狭さを思い知らされることになるからである。この方法は、言いかえれば、作家が対立する人物の世界を理解し、それを自己の世界の内に領略するといういわば自己世界の深化拡大による方法と言えよう。

実際には作家はこの二つの方法を時に応じて適当に使っているものと思われるが、この二つの方法は、作家の認識的世界に与える影響という点では大きな違いがある。前者の方法のみをとる作家は、自己の純粹さ、立場および主張の一貫性ということは維持できるかもしれないが、彼の内的世界は余り拡大しないだろう。それに対して後者の方法をと

る作家は、非常に柔軟な精神の持ち主であり、彼の感度のよい内的アンテナはつねに外に向けられており、そのアンテナを通じて時代の新しい傾向が絶えず入り込んでくる。もちろんそれとの戦いはその作家に多大な苦痛を与え、時には矛盾した発言を行なわせるが、しかしその作家はその内面における苦しい戦いを通じて確実に自己の世界を拡大し深化させているのである。上に引用した「様々な人物を介して語る」いわば「弁証家」としてのトーマス・マンが後者の方法を常にとっていたのは言うまでもないだろう。

V

以上のべるように、トーマス・マンのそのような変化の秘密は彼の独自の自己認識の仕方にあった。さらには、彼の創作の方法のなかにもその原因は求められた。一言にして言えば、その方法は自己の立場や意見をいったん留保しながら、対立する相手の異質な世界に入り込み、彼らの立場や主張を彼らの内側から理解しようとする方法であった。

ところで、このような方法によるトーマス・マンの変化は、天文学における天動説から地動説への発展、いわゆるコペルニクス的転回と酷似している。最後に、上のトーマス・マンの変化のメカニズムをより具体的に理解するために、この転回がいかんにして可能になったか、ごく簡単にみておこう。

朝永振一郎氏は1973年10月に京都で『物理よもやま話』と題した講演を行なっている。そしてこの講演は後に岩波のPR誌『図書』（1974年1月号）に掲載されているが、以下の叙述は、そのほとんどがこの『図書』に依拠している。

この講演の目的は、物理学がなぜ「常識に反する考え方」⁴⁸⁾をするか、つまり日常の素朴な経験とか考え方からすれば決して理解できないような物理学の思考法についてわかりやすく解説することにある。その具体例として氏は天文学の発展をもち出しているのである。その場合特徴的なことは、天文学の発展が人間の行動範囲の拡大との関連で説明されているということである。先に結論を簡単に言ってしまうと、人間の行動範囲が拡大するにつれて天文学が発展してきた、ということになる。これには四つの段階があるが、一つ一つの段階をいさ少し詳しくみてみよう。

まず第一段階だが、この段階においては人は交通手段の未発達もあって、余り遠くまで旅をすることはなかった。このような状況にあっては、人は地球が平らであると信じていた。今日でもそうだが、ある一定の狭い範囲においては地球が平らであると考えた方が便利であり、またそれは日常的真実でもある。

48) 朝永振一郎、『物理よもやま話』（『図書』、岩波書店、1974年1月号所収）3頁。

第二段階になると、人々の行動範囲はもう少し広がってきた。人々というのは中近東の人々のことであって、彼らは必要にせまられてかなり昔から砂漠や地中海を行き来していた。そのとき彼らは方角を知るために何かを目印にしなければならなかったが、砂漠の上とか海の上においてはそのような目印がなかった。止むを得えず、彼らは空の星を目印とした。そして星についての色々な経験をつみ、知識を蓄積していった。その結果わかったことは、北の方へ行くと北極星がだんだん高くなり、南の方へ行くとだんだん低くなるということである。これを説明するとき、地球が平らであるという考え方では説明しにくく、地球が丸いと考えると説明しやすかった。このようにして彼らは次第に地球が丸いという考え方を持つようになったのである。この考え方は、その後さらに人間の行動範囲が広くなり、つまりコロンブスやヴェスコ・ダ・ガマあたりになると、たしかに赤道を通ると北極星が水平線の下に入ってしまうなどといった事実から一層確かなものとなり、なにより自分たちの経験に直接結びついたものとなった。日本人にとっては、自然的条件から、道標となる目印が多く、このような考え方は全く生まれてこなかった。

ここまでは天文学における関心は、地球は平らか丸いかということであったが、つまり地球が動いているのか、天体が、象徴的に言えば、太陽が動いているのか、いわゆる天動説か地動説かといったことはまだ問題になっていないが、第三段階になるとそれが問題となる。

そこで第三段階に入るのだが、このころになると、人間の星に関する知識は一層豊富になり、その観測技術も飛躍的にのびていた。そうなればなるほど天文学において一つの大きな矛盾が浮き彫りになってきたのである。つまり、星の運行を当時の通説であった天動説で解釈すると、恒星の方は、地球をめぐるひじょうにきれいな規則正しい運動をしていることがわかるが、惑星の方が非常に複雑な運動をしているのである。いわゆる周転円運動といって、円運動の上にもう一つの円運動が加わるという運動だが、ある星の動きなどはこの操作を何十と重ねないと説明できず、またできたとしても非常に誤差の多いものであった。しかも惑星ごとに全く独自の、ちがった運動をしているというのであるから、これでは惑星に関しては法則がないのも同然である。

ところで物理学を含む自然科学には一種の「基本的信仰」⁴⁹⁾ というものがある。これは何かというと、「あらゆる自然現象の背後にはすべてに共通する普遍的な法則があるのではなかるるかという考え方」⁵⁰⁾ であり、逆に言えば、自然科学者はつねに「宇宙全体を支配するただ一つの法則といったものを見つけないという願望」⁵¹⁾ を持っているということである。

49) 朝永振一郎、同掲書、8頁。

50) 朝永振一郎、同掲書、8頁。

51) 朝永振一郎、同掲書、8頁。

ある。この「基本的信仰」からすれば、惑星の一つ一つがそれぞれ無関係に、固有の複雑な軌道をもっているということは、どうしても理解しがたいことである。従ってその背後にすべての惑星の運動を統一的に捉える法則があるのではなかろうか、という考え方をする天文学が出てきたとしても何ら不思議でなく、むしろ自然なことである。ともかくそういう天文学者、すなわちコペルニクスのことだが、そういう天文学者が出てきた。彼は次のように考えたのである。もしかりに自分の身体を太陽の上にもって行って、そこから惑星の運動を見渡したら、いったいどうみえるだろうかと。そうすると、みごとにすべての惑星は周転円といったような複雑な運動をしているのではなく、単純な円運動になる。まさにコペルニクスの転回であり、地動説の誕生である。後にそれは円ではなく、長円であるということがわかるが、知識の質としては、また天道説から地動説への発展という意味では基本的には何ら変わることがない。ともかく天文学の世界においては、簡単な円運動で複雑であった惑星の動きが説明できるというので、地動説が天動説より優位に立ったのである。

ところで、このことと人間の行動範囲との関係であるが、コペルニクスの場合は、実際に太陽の上まで人間が旅するということが不可能であった。では彼は何によってそうしたのであろうか。「思考の上で」⁵²⁾、つまり彼は幾何学を使ってそうしたのである。この点は重要である。第二段階までの天文学の発展は、実際に人間が自分の身体を現地までもっていくということによってなし遂げられてきたのであるが、第三段階への発展はこれと異なり、「思考の上で」、言いかえると想像力によって実際は不可能な所へ自分の身体を持っていくという方法によって、はじめて可能となったのである。そういう意味で第二段階から第三段階への発展はそれまでの発展と質的に異なっていると言える。

最後の第四段階だが、これは第三段階の場合と同じく、人間は「思考の上で」太陽のはるか遠く、つまり太陽系をとび出たところまで旅をし、そこから太陽系を見下すということを行う。あるいは同じことになるが、各々の星の上に自分を自由自在にもっていき、そこから他の星をみるということを行うのである。なぜならば、これを行ったのはニュートンであるが、彼によると、太陽といろんな惑星の間の法則と、地球と月の間の法則と、あるいは地球とリンゴの間の法則が、すべて万有引力という一つの法則によって支配されているということになる。つまり、万有引力という考え方からすれば宇宙においては中心というものがなく、各々が関係のなかに存在し、逆に言えば、それぞれ引っぱりあっている星が全て中心であるということになるからである。このような考え方は太陽系の外に出なければ不可能である。この考えからすると、以前の天動説も地動説も質的に同じものである。なぜなら両説とも宇宙の中心は何であるかという考え方にしばられているからである。第四段階のニュートンの万有引力説になるとそのような宇宙の中心志向はなくなり、全ては

52) 朝永振一郎、同掲書、9頁。

自らの内に中心をもちながら相対的な関係のなかに包み込まれているのである。

以上が四つの段階のあらましが、氏はこの四つの段階に応じて「上下の概念」⁵³⁾が全く異なってくるという、非常に興味深い考え方をのべている。「上下の概念」は単に空間的な意味をもっているのではなく、われわれはその概念に、それぞれの段階の人間が信じていた価値観ないし世界観のあらわれを見なければならぬだろう。

では「上下の概念」とは一体何であるのか。これは基本的には宇宙の中心とされている方向が下であり、そこから離れていく方向が上であるという方向概念である。従ってこの基本的なみかたからすると、第一段階から第二段階までは、地球が平らであるとか地球が丸いという地球の形態に関する認識においては決定的な違いがあるが、この「上下の概念」においては全く違いがない。なぜならどちらも天動説のカテゴリーのなかにあり、地球が中心であるという考え方に変わりはないからである。

劇的なのはやはり第二段階から第三段階への発展による「上下の概念」の逆転である。天動説から地動説への発展とは言いかえると宇宙の中心が地球から太陽に移ったということである。これにともなって「上下の概念」は以前と全く逆になる。天動説、とりもなおさずこの説においては素朴な日常的考え方が支配的であるが、この説において上であったものが、地動説においては下になるというのである。だから今日でも地動説にもとづいて正確に表現するならば、人は「リンゴが上に落ちました」と言わねばならない。この表現が全く奇妙で不自然であるように、今日でも日常的な素朴な考え方からすると、地球が動いているのであり、太陽は止まっているのだという地動説の考え方は奇妙であり不自然である。太陽を動かされた方が、日常の経験には都合がよいのである。

さらに第四段階になると、宇宙の中心は各々の星に移り、言いかえれば宇宙の絶対的中心はないということになるが、このことから「上下の概念」も絶対的に上、絶対的に下という関係はなくなる。絶えず中心は移動し、「上下の概念」は全く相対的な意味しかもたない概念となるのである。

以上、人間の行動範囲の拡大による天文学の発展と、それに伴う「上下の概念」の変質とをみてきたが、このことからわれわれは、トーマス・マンの変化との関連で、何を学びとることができるか。つまりそれはトーマス・マンの変化とどのような関連があるのだろうか。最後にこのことをみておきたい。

天文学においては、人間の行動範囲が拡大するにつれて、その発展が促され、また「上

53) 朝永振一郎、同掲書、4頁。

なおトーマス・マンに関する引用文は次の書による。

『非政治的人間の考察』（前田敬作・山口知三訳）、筑摩書房、1968—1971年。

『トーマス・マン全集』、新潮社、1972年。

下の概念」も大きく変化を遂げてきた。ことに天動説から地動説への発展のときは、人間の行動範囲の拡大は、それ以前とは異なり、人間にのみ固有の思考力、いいかえると想像力によってなされた。そのことによって天文学は俗に言うコペルニクスの転回を遂げ、その宇宙観は逆転したのである。

トーマス・マンにおいては、彼は自己の立場や主張（日常的な素朴な考え方）をいったん留保し、そして芸術家に固有の想像力によって敵対する「文明の文学者」ないし作品の中で自分に抵抗してくる人物の立場に立ち（太陽の上に自分の身体を乗せる）、そこから彼らの言うところや考えるところを理解しようとしたのである。そしてそのことによってトーマス・マンは結果としては反デモクラシーから容デモクラシーへ変貌（「上下の概念」の逆転）することができたのである。もちろん、今日のわれわれが日常の狭い範囲においては依然として天動説をとっているように、トーマス・マンもどんなに政治的に変化しようとも、本質的には彼の固有の世界、あえていえば反政治的（決して非政治的ではない）、ないし反デモクラシー的立場に愛着をもちつづけていた。ただ彼の人間としての、さらに芸術家としての誠実さ（自然科学者の「基本的信仰」）がつねに彼の時代がつきつける諸問題を真剣に考えるよう要求したのである。『考察』のなかでトーマス・マンが二つのモットーをかかげ、そのうちの一つが「自分をよく比較したまえ。自分が何であるかを認識したまえ。」であることは既にのべたが、実はもう一つは「一体、どう魔がさしてこんなガレー般に乗りこんでしまったのか。』⁵⁴⁾である。彼をガレー船に乗りませたのは決して「魔」というものでなく、そのような彼の誠実さである。上のところで「彼の任務は多くの世界に住むことを、悪い世界に住むことさえ要求する。」という彼の言葉を引用したが、この彼の芸術家としての任務に対する忠実さこそが、彼をガレー船にのりこませたのである。そしてそのことによってトーマス・マンは「悪い世界」（天動説からみると、地動説とは悪魔の説である）に住まざるを得なくなるが、しかしまさしくそのことによってトーマス・マンは悪い世界のもつ人間的真実さを知ることができたのである。

以上の解釈はこじつけかもしれない。しかしトーマス・マンが「変節」したのではないことだけは確かなことである。と同時にこの変化を眼前にしたとき、いくつかの感慨を禁じ得ない。これを記してこの小論を閉じる。

それにしてもなんとトーマス・マンは終生変わることなく政治的であったことか。

それにしても今日なおなんと我々のまわりには天動説信奉者の多いことか。

自然科学者はなんとすばらしい「基本的信仰」をもっていることか。